

大阪大谷大学

令和六年度 入学試験問題（公募制推薦・前期B日程）

国 語

注意事項

- 一 問題用紙は、全部で十二ページです。解答用紙は一枚です。
- 二 解答用紙の所定欄に受験番号と氏名を記入してください。
- 三 解答はすべて解答用紙の所定欄に記入してください。
- 四 問題用紙は持ち帰ってください。

□ 次の文章を読んで、後の問に答えよ（設問の都合上、原文の一部を改変している。また、設問に字数制限がある場合、句読点・符号等はすべて字数に含む）。

ミサは中学の頃から電車通学だった。行きはぎゅう詰めになる路線なので座るなどあり得なかったが、帰りはタイミング次第では一緒に通学していた友達のマユミと並んで座れた。

どういうタイミングかというとき、掃除当番じゃないときだ。そのとき駅まで歩いて掴まる普通電車が空いているギリギリで、その次の電車からだとの駅から高校生がたくさん乗ってくるのもう座る余地はない。最初のうちはどちらかが掃除当番だったら諦めていたが、そのうちどちらだったか気がついた。掃除当番じゃないほうが先に駅に行って席を二人分取っておけばいい。それなら当番のほうが掃除を終わって駅まで走れば二人とも座れる。当番のほうは滑り込みになるので、取っておく席はカイサツを通って一番手前の車両の端。それからお互い、相手が掃除当番のときは先に駅まで走った。二人ともがお気に入りの端っこの席を取って待っておくために。端の席に靴を立てて、自分はその隣に背筋を伸ばして座る。ときどきわざとカイサツのほうを窺いながら靴の把手に手をかけて、いかにも人待ち風情を見せて。

その様子が周囲の人にどれほど賢しく見えていたのか。今でも思い出すと恥ずかしくて身をよじりたくなる。

「何をやってんねん、あんたは」

目の前に立ったおじいさんにいきなり詰られた。あんたは、というのが自分のことと気づかず、しばらくいつものようにカイサツを窺ったりしていた。

「あんたや、あんた。座席に靴座らせとるあんたや」

そこまで言われてようやく自分のことだと気づいて振り向いた。頭の禿げ上がった小柄なおじいさんが、怖い顔で自分を見下ろしていた。

え、何。このおじいさん、あたしに言うてんの。何言うてんの。

その年頃に特有の反射的な反感は、ユルぎなく自分を見据える怒りのマナザシに敢えなく潰えた。

A

潰えた。

「あ、あの、これは友達のお鞆で、友達が後から来るんです」

「そんなことが理由になるか！ その友達より先に乗ってはる人がぎょうさんおんのに、後から来るあなたの友達があなたが先取りしといた席に **B** 座るんかい！ おかしいやろが！」

そんな大きい声で怒鳴らんといてや、周りに見られて恥ずかしいやんか！ 恥ずかしい——そう思って周囲を見回して **C** 身が縮んだ。

うるさい老人に向けられていると思った非難のマナザシは、全て自分に突き刺さっていた。あんなに怒鳴られてかわいそうに——そんなふうに乗っている目はひとつもなかった。俯うつむいて肩を落としている自分が同情されるだろうと思っていたのに。あんな子供を大人げなく怒鳴りつけるなんてかわいそうにと老人のほう白い目で見られると思っていたのに。

白い目はヨウシヤdなく子供であるミサのほうに向けられていた。

それは周囲の人々が老人と同じ苛いら立ちをミサに抱かかっているからだ、と気づかない程には子供ではなかった。

恥ずかしい。注目を集めてしまったからではなく注目を集めた理由が恥ずかしい。この車両に同じ学校の生徒は乗っているだろうか。クラスメイトは乗っているだろうか。

「と……友達が、掃除当番で疲れて帰ってくるから」

「やったらあなたが席替わったつたらええやろが！ 言い訳すな！」

こんなことで言い訳をするほうが恥ずかしいなんてことはもう分かり切っていたのに、言い訳せずにはいられたなかった。案の定喝破②されて終わる。誰も執り成してくれないことがミサに自分の立場を思い知らせた。今までの自分たちの『名案』は、他人からは苦々しく思われる小賢しさだったのだ。

「**X**」

異様な空気を読めないマユミが電車に乗ってきた。老人がマユミのほうをじろりと振り向く。

「あんたが友達か」

「えっ、何……」

マユミは戸惑いながらミサのほうに近づいてきた。

「ミサ、このジジイに何かされたん？」

小声で訊きいたつもりだったのだろうが、マユミは地声が大きかった。

「何かしとつたのはお前らやるが、しよつちゆうしよつちゆう！」
老人が雷のような声を落とした。

「混んでる電車でみんな座りたいのに、鞆座らせてまで連れの分の席取って、どんな教育されとんじゃ！」
え、ちよつとお。何よこのジジイ。マユミが唇を尖らせて言い返しかけたとき、

「どこの学校のガキどもやお前らは！ 言うてみい！」
——学校に言いつけられる！

ミサはとっさに席を立った。

「降りよ」

マユミに鞆を押しつけて、老人に頭を下げる。

「Y」

言い捨てるような口調で、だが一応は謝った。この辺でマユミも自分たちに向けられている白い目に気づいたらしい。不満そうな顔のままミサと一緒に頭を下げる。逃げるように電車を降りて、ホームのベンチに座る。程なく発車のベルとともにドアが閉まり、電車が走り始める。ミサが取ってあった席は、電車が走り出しても誰も座っていなかった。

「……絶対ホームから見えへんようになったらあのジジイが座るんやで」

ふて腐れたようにマユミがコンクリの床をぐわした。

「自分が座りたかったから難癖つけてただけやで、絶対」

③ そうじゃないのは二人ともたぶん分かっていた。一方的にミサたちを怒鳴りつけていた老人。ミサたちに向けられていた白い目。何かしとつたのはお前らやるが、しよつちゆうしよつちゆう！

週に二度か三度はこんなことをやっていた。不愉快に思いながらミサたちを覚えていた乗客は、あの中にどれくらいいたのだらう。

へこんだ。名案を思いついたつもりでいたのに、それはずるいことだとこっぴどく叱られた。他人から、公衆の面前で。

あの老人が腹に据えかねて人前でミサを怒鳴りつけるほど二人は今まで目立っていて、それもひどくみつもみつもなく目立っていたのだ。

「Z」

マユミはまだふて腐れている。でもふて腐れている理由がわかる。ミサも同じ理由でふて腐れていたからだ。ふて腐れたポーズを取っていないと泣いてしまう。他人に怒られて恐かったのと、周囲の白い目が恥ずかしかつたのと、他人に叱られるまでその行いを恥ずかしいと思わなかった自分たちのバカさ加減が情けないのと、——制服で学校が分かつたら言いつけられるかもしれないという心配も少し。ミサたちの名前まで分かるわけがないけれど、例えば朝礼なんかで「このような苦情が当校にありました」なんて発表されたら内心の屈辱は想像を絶する。

「でも、今度からやめとこな」

ミサのほうから言った。

「またあんなふうに難癖つけられてもイヤやし」

そう付け加えると、マユミも無言で頷いた。それがそのときのミサたちの精一杯の反省だった。別にあたしらが悪いわけちゃうけどジジイがうるさいからもうやめといたるわ。

⑤ 思春期の繊細さは自分たちの落ち度を髪の毛一筋ほども認めたがらない。だが、心の隅に確かにわだかまる疚しさがその日から乗る車両を変えるようになった。ミサもマユミも、もう荷物で乗り物の席を取っておくようなことはしなくなった。そしていつの間にか、そんなことは非常識でみつともないと最初から知っていましたよというような顔をするようになっていた。あの老人に叱られて初めて知ったことだなんてお互い口にも出さず。けれど、そんな顔ができるのはあの老人のおかげだと覚えていることもお互いが知っていた。

(有川浩著『阪急電車』による)

問一 二重傍線部 a ～ e のカタカナを漢字に直せ。

問二 空欄 A B C に入る最も適当な語を、次のア～カの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

- ア がっくり イ しっかり ウ ぎくりと エ そっと オ しれっと カ ペしゃんと

問三 傍線部①「注目を集めた理由」とは、ミサたちのどのような行動が注目を集めたというのか。その行動と、それが注目を集めた理由を、本文中の語句を用いて、四十五字以内で説明せよ。

問四 傍線部②「喝破」の意味として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 非を大きな声で叱ること。
- イ 持論を展開して勝つこと。
- ウ 真理を明らかにすること。
- エ 自分の非を認めること。
- オ 相手をねじ伏せること。

問五 空欄 X Y に入る表現として最も適当な文を、次のア～オの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

- ア お待たせ！ 席取つといてくれてありがとう！
- イ 絶対、自分が座りたかっただけで
- ウ 早く早く！ 席取つといてあげたから！
- エ なんちゆうことすんねん、あんた
- オ すみませんでした、これから気をつけますっ

問六 傍線部③「そうじゃない」とあるが、では、実際はどうだというのか。本文中から、解答欄に合う形で二十字以上二十五字以内で抜き出して答えよ。

問七 傍線部④「ふて腐れたポーズを取っていないと泣いてしまう」とあるが、なぜ泣いてしまうのか。その理由として、あてはまらないものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 心配
- イ 悔悟
- ウ 防衛
- エ 恥辱
- オ 恐怖

問八 傍線部⑤「思春期の繊細さは自分たちの落ち度を髪の毛一筋ほども認めたがらない」とあるが、それはどういうことか。それを説明する次の文章の、空欄 P・Q に入る最も適当な語句を、それぞれ二文字で答えよ。

中学生のミサとマユミは、叱られたり批判されることに傷つきやすい。したがって、仮に自分たちが間違っていたとしても、Pに認めることができないので、車両を変えたり、鞆を置いて席を取らなくなつたが、それを「Q」を付けられたら困るといふ言い方ではできないということ。

問九 近畿地方を舞台としていない作品を、次のア～カの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 細雪（谷崎潤一郎著）
- イ 白い巨塔（山崎豊子著）
- ウ 夫婦善哉（織田作之助著）
- エ 坊っちゃん（夏目漱石著）
- オ 高瀬舟（森鷗外著）
- カ 檸檬（梶井基次郎著）

□ 次の文章を読んで、後の間に答えよ（設問の都合上、原文の一部を改変している。また、設問に字数制限がある場合、句読点・符号等はすべて字数に含む）。

どっちもファッションでしょう？

タイトルにした一言は、スーパーフードやジャンクフードについてニューヨークで調べごとをしていた私に、ある友人が言い放った一言だ。教育学の教授である彼は、四〇年近くもニューヨーク都市圏に暮らす。この街に色々なファッション（A）が出ては消えていったことを直に見てきた人物に言い切られては、そうなのかなと思ってしまう。他のニューヨーカーたちも、「あはは、たしかにね」と反論らしい反論がなかった。

スーパーフードがファッションと言われても仕方がないという点は、読者のみなさまにも想像に難くないだろう。ニューヨークがらみで理由を述べるならば、「いまニューヨークのヘルシーな人たちに大人気」などというセンデ^ン文句は、食材や料理を紹介する雑誌やネット記事において、ひとつの定番である。もちろん、ニューヨークがいつも世界の流行の発信地だとは限らない。しかも、日本で「ニューヨーク発」などとうたわれている商品のなかには、例えばギリシャ風ヨーグルトのように、実はニューヨークとさほど関係ないものも数知れず。都市のイメージがキャッチコピーに利用されているに過ぎない。

ただ、ファッションにおいてニューヨークがかなり特殊な都市であることは、やはり事実だ。ニューヨークには世界から多種多様なモノが集められていて、「これ、なんか体に良いらしいよ」という噂が立つことも、「ちよつと試してみるか」という気になることも、自然な流れで起こる。しかもニューヨークでなら、世界のありとあらゆる食材や料理が、街のあちこちで手に入ってしまう。こういう出会いや機会が、驚くほど簡単なのだ。かくして、ファッションはニューヨークで火が付きやすい。

さらに、スーパーフードの場合には、無数の業者がニューヨークで売り出しをかける。人びとの健康に対する意識が高く、かつ新しいものが受け入れられやすい気風が、ビジネスチャンスを生みやすいからだ。また、ニューヨークである程度うまく売れば、次に他の地域に打って出るのが楽という理由もある。

スーパーフードのファッション性を考える時、我われはまず少し前までの日本食ブームを考え直してみる必要がある。

一九六〇年代から八〇年代にかけて、コメを食べていると太らないとか、長生きできるという風評が、欧米各国で広まった。今日のスーパーフードほどの概念は当時なかったようだが、いわばコメはそれに類するものと化した。その次に起きた寿司ブームで

は、コメの健康的なイメージが一助となり、その奥深い世界も知られるようになった。

ところが、コメ、特に白米の優位は揺らいだ。白米は玄米と比べて栄養価に難が付くという話が、欧米で広く意識されるようになったからである。同じ時期に進んだのが、パンも精白粉のものではなく、全粒粉や雑穀入りを選ぶべきという志向であり、コメにも同じことが起こったと考えられる。日本でも同じ事情で玄米食を好む人はいるものの、ニューヨークをはじめとする米国東海岸では、その度合いが驚くほど高い。二〇〇〇年代にもなると、アジア系の料理店は、注文を取る時、「ホワイトライス（白米）になさいますか？ ブラウンライス（玄米）になさいますか？」などと聞くようになった。聞かれない店でも、客が「玄米にしてください」と願い出ることが出来る。現在でも、私の欧米人の友人たちは、玄米が選べる状況下で、誰一人として白米を選ばない。

その後は、そもそも炭水化物が身体に悪いという考えが広まってきた。夕食に穀物類を含めないという健康法も、ジッセンしているニューヨークはよく目にする。ダイエット中の人やモデルさんなら、どの食事でも炭水化物はキョクリヨク摂らないという。そこまで行かなくても、どうせ炭水化物を摂るならと、先述の通り玄米や全粒粉などを原料とする製品を選ぶことは、ニューヨークですでに一般化しているし、炭水化物がより少なく他の栄養価が高いキヌアやアマランサスなどで代替しようとしている人も、とても多い。

この状況を具体的に書くのに、二〇一〇年代に米国で広まったポケという料理を挙げたい。ハワイに由来する料理だ。もともとは、魚介類の切身に香辛料や調味料を加えた和え物で、私が一九九〇年代にホノルルで食べたポケは、どれも日本の「ヅケ」のようなものだった。ここに、日系の海鮮丼、韓国系のビビンバ、米国のサラダ志向が合流するようにして、現在の形になった。ポウルのサイズから、中に入れるものまで、客が選べるのが楽しい。普通、ベースとなるものは、白米、玄米、ミックスサラダ、麺から選ぶのだが、キヌアが選択肢に入っている店もニューヨークには多い。ベースを選んだら、次は「タンパク質」を、サケやマグロやエビの刺身、それぞれをグリルしたもの、豆腐、プルコギ風牛肉などから選ぶ。トッピングとして人気なのは、枝豆、アボカド、半熟卵、海藻サラダなどがある。さらに、ネギ、ゴマ、海苔、ローストガーリックなどを好みで乗せ、ソースを選んだら、完成。ニューヨークでは、このポケがすでに昼食の定番の一つとなっており、サンドイッチくらいの頻度で食べるという人も出てきているのだが、他方では店の乱立で過当競争が起きてもいる。

もちろん、かつての白米のようなヘルシーな食材と、スーパーフードは違う。スーパーフードは、栄養価のバランスが際立って良いと言われているので、ヘルシーの上を行かねばならないのである。

ただし、ニューヨークで見ている限り、同じスーパーフードでもウケる消費者層がそれぞれのように思う。例えばチアシードは、女性がヨーグルトに入ったものを買い求めたり、家で同様の食べ方をするために買ったという話をよく聞く。反面、男性でハマっている人はあまり見ない。アマランサスやファロは、ポケのような外食で出す店が少なく、自炊派に人気だ。流行というだけでなく、こういう、ウケる層が分かれるという意味でも、ファッションなのである。

ファッションは人それぞれであっていい。ブロードウェイのミュージカル業界で働く米国人の友人（六〇代、男性）は、毎日の朝食がなんと納豆だ。彼は、「ハッコウ食品は体にいいから」と、日系スーパーに行くたびに納豆を大量に買い、冷蔵庫にも冷凍庫にも詰め込んでいる。ただ、食べる時は、付属のタレや辛子を使わずに、捨ててしまう。「塩分は体に悪いからね」。彼のこの食生活は周囲によく知られている。だが、真似しようという人などいない。彼の友人（五〇代、女性）は言う。「付いていけないわ。私は真似しない。もう他のことやっているもの。それは実は同じくらいクレイジーなの。何かは内緒だけだね。」

ジャンクフードもファッションの枠に収まってくる。

昨今の米国では、SNSを中心に、ある菓子商品（クッキークリームサンド）への愛情を示すことが、異様な盛り上がりを見せている。人びとは、「体に悪そう」という暗黙の了解をもちつつも、そこに何らかの価値（ノリの良さ、仲間意識など）を見出そうとする。ただ、その他の大部分の人びとは、それに我関せずである。

「ニューヨークで大人気」などというファーストフードが日本によく入ってくることも、ファッション性が高い話だ。不思議なことには、日本に入ってくるファーストフードは、たしかにニューヨークで一時期人気となったものの、日本に入ってくるころには、現地で「しよせんジャンクフード」という認識が定着し、もう以前ほど売れなくなっているものばかり。それが、まるでとてもオシャレなものであるかのように、かつ非常に高級化されて、日本へと移入される。あのドーナツも、かのハンバーガーも。

もちろん、ニューヨークも米国の一部なので、ジャンクフードは街に溢れている。ただニューヨークで着目したいのは、ジャンクフードに対して強いキヒカンをもつ子供たちが、目立って増えているということである。友達の家なんかでジュースやアイスクリームを勧められても、やんわり拒否するということが、ここ一〇年間で「当たり前」になってきているという。そして、それは「B」なことなのだそう。上流階層の話ならまだしも、これは中流階層でも起きている変化だ。例えば、筆者がよく遊んでいる友人夫婦の娘さん（一三歳）に「なぜジュースもアイスも要らないか正直に教えて」と聞いたところ、しばらく返答に困っていたが、「こういうの、古いと思うのよね」と教えてくれた。いわば、脱ジャンクフードもまたファッションなのである。

（太田心平「どっちもファッションでしょう？—ニューヨークで見聞きするスーパーフードとジャンクフード」による）

問一 二重傍線部 a く e のカタカナを漢字に直せ。

問二 波線(ア)く(オ)の内、異なる品詞を一つ選び、記号で答えよ。

問三 空欄 A に入るファッションと同じ意味の言葉を本文中から漢字二文字で抜き出して答えよ。

問四 傍線部 X 「難が付く」の意味として最も適当なものを、次のアくエの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 拒否される イ 欠点を指摘される ウ 評価される エ 反論される

問五 空欄 B に入る最も適当な語を、次のアくエの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア カジュアル イ マスト ウ クール エ ノーマル

問六 傍線部 Y 「ジャンクフード」の例として適当なものを、次のアくエの中から全て選び、記号で答えよ。

- ア チアシード イ ジュースやアイス ウ 寿司 エ ハンバーガー

問七 傍線部①「都市のイメージがキャッチコピーに利用されているに過ぎない」とはどういうことか。本文中の語句を用いて、六十字以内で説明せよ。

問八 傍線部②「少し前までの日本食ブーム」の流れについて、次のア～オを時系列に沿って並び替え、記号で答えよ。

- ア 炭水化物そのものが身体に悪いという考え方が流布した。
- イ 白米は玄米に比べて、栄養価の面で劣るといふ評価が欧米で広く意識されるようになった。
- ウ コメを食べていると太らないとか、長生きできるという風評が欧米各国で広まった。
- エ 炭水化物を摂取するなら、少しでも栄養価の高い玄米や全粒粉を原料とする製品を選ぶことが、ニューヨークで一般化した。
- オ ハワイで興ったポケが、ニューヨークで昼食の定番となった。

問九 問題文は大きく三つの意味段落に分かれる。第二段落と第三段落の最初の五文字を、それぞれ抜き出して答えよ。

問十 次のア～エについて、この文章中に書かれている内容に合っているものには○で、合っていないものには×で、それぞれ答えよ。

- ア ニューヨークでは、米国の一部らしくジャンクフードが街中に溢れているが、しかし、ティーンエイジャーの間では、脱ジャンクフードが格好良いと捉えられている。
- イ スーパーフードではウケる消費者層が異なるものがある。たとえば、ポケは女性よりも男性に人気のスーパーフードである。
- ウ ヘルシーな食材と考えられていたコメは、スーパーフードであるキヌアやアマランサスなどに置き換えられるようになったが、その理由はコメが炭水化物だからである。
- エ ニューヨークには、世界中から多種多様な新しいモノが入ってくるため、流行に火が付きやすく、ビジネスチャンスも多いから、ファッション性が高い。